
アングリーマン

夕焼け

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アングリーマン

【Nコード】

N7772M

【作者名】

夕焼け

【あらすじ】

怒れる人々がいる。彼らの本当の声は、多くの場合、言葉よりももっと奥のほうに潜んでる。

なんとなく駄目な感じになってる時、大抵誰かしらが嬉しさや楽しさを分けてくれる。

嬉しくなったり楽しくなったりすると、駄目な気分が少し和らいで、もう少しやれそうな気持ちになる。

多少の嬉しさや楽しさで人生がここぞとばかりに拓けたりは無論しないのだけど、そこが映画や小説と違う、人生の面白い部分であるようにも思う。

登れば落ちるし、落ちればまたあがる。

ばいーんって。

いや、だけどそうとも言い切れない。

僕はなんだかんだで優しい人との出会いに恵まれてるから、僕が落ちてる時には優しい誰かがバイーンってしてくれる。

彼らがいてくれるおかげで、なんだかんだいって最底辺まで落ちることはそう滅多に無い。

でもそうじゃない人も世の中にはいる。

理不尽な目に遭った時、死にたくなるくらいどうしようもなく寂しい時、失くしたくないものを失くした時、声が枯れるまで叫んでも、誰にもその声を聞き入れてもらえなかった時、人は人に対して、現実に対して、この世界の何もかもに対して失望をする。

高いところから卵が落っこちる。

僕なんかの場合は、いつも下に風船が用意されていて、卵は上手い具合にそこに落ち、反動でまた空を舞う。

でも、そうじゃない人も世の中にはいる。

卵は何に遮られることも無く、まっすぐ地面に向かって落下して、当然の如く割れる。

そういう事も稀によくある。

時々遭遇する、必要以上に屈折した人、必要以上に横暴で嫌味な人、必要以上に心を閉じてて、人に対してやたら冷たい人なんかは大抵そうだ。

割れた卵を心の中に宿してる。

彼らは、取りこぼした卵のほとんどを誰にもキャッチしてもらえず、落ちた卵は当然地面に衝突して割れる。

割れた卵の殻をいくつもいくつも心の中に積み上げて、その殻は途方も無いほどに積み重なって、やがてちよつとやそつとじゃビクともしない頑強な壁になる。

彼らは時として、頑なに世界を拒んでるように見える。

でも、それは世界が彼らを散々拒んできた結果生まれた隔たりのようにも思える。

彼らにはいつだって、自分自身しか頼れるものがない。

落ちれば砕け、それでもなお自身の砕けた足で立ち、登る以外の選択肢を与えられない。

その選択を拒むことは出来る。

現実を直視せず、逃げ続ける事も出来る。

どん底での停滞だけがそこにはある。

現実って残酷だ。

僕は自分が一体どれだけ恵まれてるのかを考える。

場合によっては、僕だって自分の足で登らなきゃいけなかったはずなんだ。

でも僕の場合は幸い落下先に誰かが風船を用意してくれて、そのおかげで、その勢いでまた駆け上がる事が出来た。

僕のような人間が、砕けた足で立って登るしかない現実を背負って、その困難さに絶望して心を閉ざした彼らを非難できるはずも無い。

彼らは怒りをあらわにする。

苦しみをあらわにする。

怒りと苦しみにいつだって押しつぶされそうな彼らは、ちょっとしたことで人に牙を剥く。

だから人々は怒れる彼らを恐れ、軽蔑し、遠ざける。

怒れる彼らの状況はもっと悪くなる。

怒れる人たちが、声に出して語る怒りの理由なんて様々だ。

でも、いつだって声にならない部分に真実はある。

彼らの言葉より、彼らの怒りに耳を傾けたいと思う。

その怒りの根源的な所在を探りたいと思う。

「僕だってちょっと運が悪ければ、怒れる彼らの側になっていた」という思いがあるから、ちょっと運が悪くて怒れる側になっちゃった彼らを放って、自分の幸せだけを守り抜こうとする事に抵抗がある。

僕は今、なんだかんだで悪くない人生を生きてるけど、何度もいうようにそれは僕が自分のちからだけで手にしたものじゃなくて、周りに僕を見限らない人たちがいてくれたおかげと断言できる。

彼らの存在が無かったら、僕だって世の中の色んなものをもっと批判的にみたらうし、人をもっと強く拒絶しただろうし、もっと自分しかみえない人間になっただろうし、より強欲に、より頑固に、より嫌味な人間になっていたらうと思う。

その程度には僕も弱い。

報われない現実にはばかり直面していたら、すぐに心が折れて、墮落する程度には僕だって弱い。

僕が絶望しないでいられるのは、僕が強い人間だからじゃなくて、ただ単に、僕が絶望する事を妨げてくれる人たちが周りにいたってだけの事だ。

優しい人間になりたいとは思わない。

でも「ほんのちよつとした運のめぐりで、もしかしたらそうなっていたかもしれないもう一人の自分」を切って捨てて、その屍の上に自身の幸福を築ける人間にもなれそうにない。

怒れる人々の心に触れたいと思う。

うまくいかない事のほうが多いことはよく分かってる。

何度も何度も何度も、本当に数え切れないくらい何度もそれを試みて、そのほとんどが失敗に終わった。

それでも怒りの本当の理由を僕に打ち明け、怒りをいくらかでも静めてくれて、今では友達と呼べる関係になれた人も、本当に少しだけいる。

だから怒れる人たちを諦めたくない。

怒れる彼らの側が諦めを口にしてたとしても、僕は彼らを諦めたくない。

だって、いつも「もう諦めてるから、自分の心はもう既に死んでるから」なんて言ってた友達が、最近になって「やっぱり諦めきれない気持ちかどつかにあるから」なんて言うようになった。

真実は、いつだって言葉よりももっと奥のほうに潜んでる。だから僕は「諦めを口にする人たち」の事も諦めたくない。

こんな考えは間違ってるんだろうと思う。

人は、常に自分より弱い何かを屠って、貪って、そうやって自身の血肉として生きながらえる生き物だ。

弱肉強食。

運に、力に、境遇に、恵まれた側が勝つ。

食卓に並んだ肉が、もしかしたら自分であつたかもしれないけど、その肉塊に同情などせずに貪り食うべきなんだ。

あらゆる生き物がそうやって自身の命を生き繋いでる。

虐げられるべき弱者を慮るなど、愚の骨頂だ。

おこがましい事この上ない。

何様のつもりだ。

自分の人生をただ精一杯生きればそれでいい。

それだけで十分だ。

そうと分かっているけど、やっぱり僕は愚の骨頂を極めてみようと思う。

賢さを誇って生きれるほど賢くは、どうしたってなれない馬鹿な人

間なんだから、馬鹿を誇る生き方をしてみようと思う。

いつか、同じような生き方を選ぶ馬鹿な友達と出会えたらいい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7772m/>

アングリーマン

2010年10月11日12時21分発行